

序 文

今年、新型コロナウイルス感染症に翻弄された一年でした。

感染拡大で経済活動が停滞している中でも、私たちが日々手にしている食料品や日用品・エネルギーの多くは、海上物流を通して、海外から輸入されています。安定的な海上輸送は、社会、そして国民の安心を得るために欠かせない、ということを改めて、身に染みて感じました。

感染症の影響で、フィリピン他の船員供給国では、乗船を目的とした船員の国内移動はもちろん、海外への渡航も制限を受ける中、乗組員は船主との雇入契約が経過し、あるいは海上労働条約に基づき旗国が定める連続乗船の最長期間を過ぎても交代できない状況が続いています。また、日本での感染の初期にクラスターが発生したクルーズ船の安全対策には厳しい世間の目が注がれ、折角、昨今注目されてきたクルーズの未来にも不安の影を落しました。他にも、海運・物流・港湾・造船を始めとする海事産業の現場の勤務体制に与えた影響は計り知れず、私たちは、今後、ウィズ・コロナの「^{ニューノーマル}新常態」にどのように対応していくか、という大きな課題に直面していると思います。

さて、当財団は、このような中で、本年6月に「設立80周年」を迎えることが出来ました。80年前、1940年（昭和15）前後の日本海運の状況については、巻末の「山縣記念財団80年の歴史を振り返って」をご参照頂くとして、当財団では、設立80周年を記念するために、「江戸時代以降」というさらに長い期間に視点を展開し、その間海運の世界で活躍した人々の評伝集『日本の海のレジェンドたち』を編むことに致しました。おかげさまで、各「レジェンド」の評伝執筆をお願いした皆様のご協力を得て、来年2021年早々には発刊出来る予定です。その際は当財団ホームページでもお知らせしますので、是非お読み頂ければ有難いです。

一方、本誌では、むしろ未来に目を向け、「海事産業の未来への展望と課題」を特集テーマと致しました。

坂本氏の「洋上風車周辺海域における船舶航行の安全確保に向けた取組み」では、近年日本でも注目されている洋上風力発電事業において、海事分野が如何に関わっていくか、について、洋上風車周辺の航行安全確保に向けた取組みに焦点を当てて述べられています。

畑本氏の「内航船員の需給予測の在り方」では、従来から問題視されている内航船員の高齢化・不足に着目し、内航船員の需給予測のあり方について考察しています。

大内氏の「風エネルギーを使用した船舶のゼロエミッション化」では、外航船舶からのCO₂排出量を2050年までに半減、今世紀にはゼロにするという2018年IMOで決議された目標を実現するために、現在注目されている、風力エネルギーを使用した「ウィンドチャレンジャー計画」の取組みについて解説して頂きました。

荻野氏の「コンテナの未来 —持続可能な社会の実現に貢献できること—」では、持続可能な社会を実現するための一助として、海上輸送以外にも、災害時等のコンテナの新たな使い方を提案しています。

さらに、自由テーマでは、万谷氏・藤本氏共著の「警告信号『汽笛を吹鳴するのは誰か』

「現行法と船舶運航者との認識の相違」において、警告信号を「誰が鳴らすのか」について、船舶運航者間や船員養成課程の教員間で見解が分かれている現状に鑑み、法と現場とのギャップ解消のための考察を行っています。

また、亀山氏の「港湾後背地のマーケットポテンシャルと港湾の利活用—九州・沖縄管区の14港湾と都市の事例から—」では、近年、外航クルーズ船の寄港地となっている九州・沖縄の港湾の中にもともとコンテナやバルクの港湾であったものが見られることから、九州・沖縄の各港湾と後背地の産業集積を分析対象として、これらの港湾のマーケットポテンシャルが物流や旅客とどのような関係にあるのかを計量的に分析しています。

今回ご寄稿を頂いた皆様や、査読を頂いた皆様に、心から御礼を申し上げます。

さて、これまで、募集論文のテーマについて、メインを指定テーマもしくは統一テーマとし、サブを自由テーマとして原稿を募集して参りました。しかし、海事関連の研究テーマは多岐に亘っており、指定/統一テーマを限定するよりも、むしろ、メインを自由テーマとして、参考までにいくつかのテーマの例示を表記するにとどめた方がよいのではとの考えに至りました。今後につきましてはご自由にテーマを設定頂き、ご応募頂きたく、よろしく願いいたします。

同時に、本誌は、海事社会・産業の現代的な問題及び将来的な方向性を捉えて世に問う役割も担い続けて行きたいと思えます。近年、海運企業の経営に当たっては、「環境」や「デジタル化」を始め多くの課題がありますが、巻末の募集要領に挙げた例示を参考にされ、テーマを選んで頂ければ幸いです。

最後に、今回もこうして『海事交通研究』をお届け出来ることに感謝しつつ、皆様のご健康とご発展とお祈り申し上げます。

2020年12月

一般財団法人 山縣記念財団
理事長 郷古 達也